教科横断的な授業づくりに関する一考察

－小学校体育科と外国語科に着目して－

衣笠　暢将(大阪教育大学)

1. 研究目的

文部科学省は，平成 29 年度 3 月公示の新学習指導要領の改訂ポイントとして「カリキュラム・マネジメント」と「主体的・対話的で深い学び」の実現を挙げており,「カリキュラム・マネジメント」と関連させ,「どのように学ぶか」という学びの質に関して改善を図っていくことが重要であると述べている。今後，体育科においても唯一の身体活動を伴う教科として教科間の関わりや学びの質を意識したカリキュラム作成を行く必要があり，特に新しく教科化された外国語科との関わりに着目した。Brewster et al.（2002）は，英語学習における横断的カリキュラムの利点を「児童への動機付け」「コミュニケーション方法への気づき」「子供の想像力・創造力の養成」など 8 つ挙げており，これらに効果があると述べている。その他にも川村（2006）や村野井（2010）によって第二言語を学習する際の利点に関する研究がなされており体育科との横断的な関わりは学びを促進する可能性があるのではないかと考えられる。

そこで本研究では,身体活動が主となる体育科と,動作イメージが記憶に影響を与える英語(外国語科)との教科横断的授業が，第二言語習得に肯定的な影響を与えるのではないかと考え，体育科の授業に英語を中心とする外国語科の内容を組み込んだ教科横断的な体育授業の方法を模索することを目的とした。

2.研究方法

2-1　教員実態調査について

対象者：大阪府下の小学校教員 98 名

調査内容：外国語教育の実施形態や指導する際の教員が抱える課題，外国語科（主に英語）を用いた教科横断的な指導が難しいと考える教科について

2-2　授業実践

期間：2018 年 7 月 9 日～7 月 18 日 計 3 回

対象者：大阪市立 S 小学校 6 年 2 組 23 名

授業内容：器械運動領域「マット運動補助倒立」

導入した英語：数字のカウントや簡易な指示語を学級の学びに応じて英語に言い換えて行った。

3. 結果と考察

3-1.　教員実態調査

教員の実態調査では，新しく教科化される外国語科を中心に横断的に関わるための方法を考察するために実施した。現場の実態として外国語に関する専門的な知識を持っているのは４割ほどでその専門的な知識の有無によって現在の学級での外国語活動の実施に有意な差がみられた。また，英語専門性の高い群と低い群，英語指導年数の少ない群と多い群の間で有意差が見られた項目が多く見受けられ教員の間で考え方・自信などでばらつきがあることが明らかとなった。

3-2.　授業実践

今回のような指示語を英語で言い換えることに関して教師と言葉のやり取りを含んだ実践の方法が体育科における外国語科との横断的な関わりについて有効であったと考えられる。その理由として,「言い換えた語が児童にとって簡易であったこと」が大きく影響していたと考えられる。また、授業後の感想文を「KH Corder」を使用し，テキストマイニングで分析した結果,「倒立」が最も出現数が多く 19 回,二番目に「英語（16 回)」，三番目以降「嬉しい（8 回)」「楽しい（7 回)」「体育（6 回)」と続いた。これらの結果から今回の授業は，児童にとって授業内容である倒立が，できた喜びや楽しさを通して味わえたことと体育授業と英語との関わりが深く現れたものであったと感想文から窺い知ることができる。出現回数の最も多かった「倒立」は「きれい」と,「英語」は「楽しい」と，強い共起関係であった。また,「英語」「楽しい」「倒立」の中心性が高いことが明らかとなった。

4. まとめ

体育授業に外国語科で学んだ簡易や表現や数字のカウントを使用することで体育科の授業を崩さずに教科横断的な関わりをしていくことが可能であることが明らかとなった。また、本実践では英語で教員が話すことを児童がわかっていると比較的集中して話を聞こうとする態度が見られた。つまり現時点で身近でない言語である英語を使用することによる児童の集中力の強化が見込まれる結果となった。これは物珍しさからくる一時的なものかもしれず一般化された時に体育科においてメリットがあるとは現時点では言えないが，今回の実践では日本語の授業と同様に英語での授業が可能であるということが明らかとなった。つまり，本実践の方法は体育授業に悪影響がないということである。これらのことから体育科は簡易な動きや語句を外国語に言い換えて教科横断的な指導が可能であり，その役割を担えることができると考えられる。